

第3次中東戦争後

45年ぶりにアンマンを再訪して

〜戒厳令下で身柄拘束された現場を検証〜

エッセイスト 近藤節夫

1. 中東へ初めての旅

夢のように瞬く間の時の流れである。あの呪わしい身柄拘束劇から早くも半世紀近い歳月が経過した。

1967年6月、俗に「6日間戦争」と呼ばれた第3次中東戦争が勃発した。二千年の長い歴史の怨念が竄ったパレスチナ自治区ほかの領土の帰属を巡るアラブとユダヤの民族戦争、そしてイスラム教とユダヤ教の宗教戦争も絡んだ戦いで、戦前の予想に反してアラブ諸国連合は、僅か6日間のうちにユダヤ人国家イスラエルに完膚なきまでに叩きのめされてしまった。その後敗戦の後遺症はアラブ諸国内のそこかしこにいつまでも屈辱的な戦禍と精神的な傷跡として残された。

第3次中東戦争が終って半年後、私は初めてアラブ諸国を訪れた。そもそもアラブへ行ってみようと思いついた動機は、その前年の1966年に単身戦時下のベトナムを訪れ、砲声の聞こえる中で米兵に銃口を向けられ恐怖の事態に直面したことに触発されたことが大きい。

実は、私が戦乱の地へ足を踏み入れるようになったきっかけは、学生時代に60年安保闘争に参加しながら、われわれ学生の主張は功を奏さず新安保条約発効によって、私は空しい挫折感を味わったことがその原点にある。その後社会に出てからベトナム反戦運動に加わり、首都サイゴンで死と背中合わせの戦場を覗いて初めて臨場感で知る戦争の厳しさ、怖さ、馬鹿馬鹿しさと真実を覚った。その時戦争の現場で戦争を直視しなければ戦争の真実は分らないということをつくづく思い知らされたのだ。

そしてベトナムを訪れた翌1967年第3次中東戦争が勃発した。この時初めてパレスチナ問題に強い関心を持った。戦争ではメディアを通して得る間接的な情報だけではなく、前年ベトナム戦争に全身で触れ、自らが感覚的に感じた臨場感を通して響いてくる生の戦争体験のうえに、アラブの乾いた空気の中で戦われた戦争を自分自身の身体で直に知りたいと思ったのだ。アラブを訪れ、生のアラブ諸国の実情を知りたい、そのためには現場を訪れなければダメだという強い衝動に駆り立てられたのである。それが、アラブという土地を訪れ、アラブの人々に会ってパレスチナ問題をじっくり考えてみたいと思った大きな動機だった。

私が第3次中東戦争でイスラエルの凄まじい軍事力を実感したのは、開戦と同時にメディアを通して知った圧倒的な戦力と、その半年後イスラエルがその力を発揮した現実をエジプトでエジプト軍の壊滅的な戦禍を目撃した時である。

エジプト(当時はシリアとともにアラブ連合共和国を結成)に着いて直ちに、首都カイロから灼熱地獄のアラビア砂漠を列車で運河の街・スエズへ向かった。第3次中東戦争の最中イスラエル空軍機の徹底的な攻撃により

19世紀半ばに完成した重要航路スエズ運河はあえなく破壊され、機能不全に陥った。カイロからスエズまで130kmの鉄路の道のは冷房設備もなく列車内はうだるような暑さだった。終着のスエズ駅では戒厳令下のスエズ市内滞在許可証を所持していないとの理由で、暫しスエズ警察に身柄を留め置かれてしまった。



スエズへの列車内で親しくなった父子

そのスエズへの途次車窓から土砂と石のほかには何もない無味乾燥なただつ広い沙漠の真只中に、イスラエル空軍機に攻撃されて木っ端微塵に打ち砕かれた無数のエジプト軍戦車の残骸を目にした。放置されたまま哀れな姿を晒している残骸を目の当たりにして、イスラエル空軍の強力な戦力に驚くと同時に、空から見ればこんな白砂荒野の中に黒い戦車群は格好の標的になったのでは

それにしてもその当時百戦錬磨にして隻眼のダヤン將軍に率いられたイスラエル軍が、いかに天下無敵の空軍力を誇っていたとは言え、そのイスラエル一国に対して結束して立ち向かったアラブ連合軍側が、かくも無残にイスラエルの軍門に降ったことで、イスラエルの計り知れない強力な軍事力を改めて思い知らされたのである。

2. 45年前の身柄拘束の一部始終

エジプトを旅した後私は、レバノンの首都ベイルートから空路ヨルダンの首都アンマンへ飛んだ。参戦国の中でもヨルダンは、この6日間戦争でイスラエルにこっぴどく叩かれた。ヨルダン川以西をイスラエルに占領されたうえに、ユダヤ教、キリスト教と並んで、イスラム教徒にとっても聖地であるエルサレムの東半分まで奪われ、イスラム国家ヨルダンが失ったものは計り知れないほど大きかった。

ロイヤル・ヨルダン航空機内で偶々隣り合わせ、意気投合したヨルダン人から紹介された古宿「アル・カサルホテル」は、アンマン随一の繁華街という絶好のロケーションにあった。その翌朝2台のカメラを抱えた私は、ひとりでホテルの近くにあるローマ時代の古代円形劇場を皮切りに、戒厳令下のアンマン市内の中心街を歩き回り、昼近くなつて市街を見下ろす見晴らしの良い小高い丘で無我夢中になつて街の景観をカメラに収めていた。

その時である。突然バタバタと飛び出してきた十数名のヨルダン軍武装兵士に一瞬にして前後左右を取り囲まれ、数名の兵士には胸元にライフル銃を突きつけられ、成す術もなく身動きのできない状態にされてしまつ

た。あつという間に身柄を拘束されてしまったのである。まるで映画の戦争シーンがシナリオ通り手際よく演じられたかのようだった。まさにあつという間の出来事だった。

その刹那何が何だか分からず呆然としている間に、包囲された兵士らに軍靴で荒々しく土を蹴上げられ、正面の兵士には無様にも急所を掴まれる有様だった。現実起きたこの危機的状況がすぐには飲み込めず、しばらくして次第に状況が分かってくるや身体がぞくぞくして小刻みに震えてきた。隊長らしきヒゲを生やした強面の男が矢継ぎ早に、

「ここを何をしている？」

「中国人か？」

「日本人ならその証拠を見せろ！」

「旅券を持っていないならお前のホテルまで行くからついて来い！」と畳み掛けるように問い質した。

確かに戦後の戒厳令下にあったアンマン市街には、いたるところ銃を提げた武装兵士が闊歩していた。道路には物々しい戦車や装甲車がけたたましく走り回り、慌しく落ち着かない空気が流れて市街全体に不安な緊張感が漂っていた。

その時普通とは違う、ただ事ならぬ異変に気づいたのだろうか、周辺の住民が三々五々寄り集まって来て、周囲を遠巻きにしながら兵士に取り囲まれた見慣れないアジア系の私を不安そうな目で見つめていた。私は隊長が兵士らに目配せをしているのに気づき、こうなつた以上運を天に任せられないと観念した。腹を括つて両手を挙げ、「ホールドアップ！」のジェスチャーをしながら無抵抗の意思を示した。暫くやり取りをした末に兵

士らに前後を挟まれながら、兵士に引き立てられるように拘束された現場から街へ下つて行つた。そのまま旅券を預けてあるホテルへ連行され、ホテルの支配人立会いの下に私の身分を確認し、旅行計画について問い質される羽目になった。



かつて「アル・カサルホテル」があった繁華街

ホテルの支配人室では、旅券を前にして型どおりの口頭尋問があつたが、こういう場では口ごもつたり、嫌な顔を見せたり、すねた様子を見せて相手に不快感を与えるより、笑顔で明るく質問に応える方が得策ではないかと咄嗟に思った。そのため意識的に極力冷静に、且つにこやかに明るく応答し、質問には淀みなく応えて、それが結果として誤解されず、「不審人物」「テロリスト」の疑いを案外早く晴らすことにつながつたのではないかと思つている。アラビア語で書かれた

意味不明の書類に、言われるままにサインして何とか身柄の拘束を解いてもらうことができた。

私が怪しげな人物ではないと分かったのか、隊長はヨルダンではその時軍による戒厳令が布かれているとして写真を撮る場合の周到な注意と要件を話し、軍事的な写真を撮ったり刺激的な行動は一切行うなと厳命し、部下を引き連れ慌しくホテルから引き揚げていった。私は漸く身柄を解放され、ほっとすると同時に、腰が抜けるような脱力感を味わった。

それにしてもあまりにもショッキングなトラブル発生に、私も些か気持ちが悪転していた。支配人室からロビーへ出るや、倒れこむようにへなへなとソファーへ座りこんでしまった。偶々ロビーに居合わせていてこの日本人捕り物帖に気づいた日本のテレビ取材班(NEETテレビ・現テレビ朝日「世界の王様」シリーズで当時のフセイン国王を取材中)から、いきなり「何をやってんですか?」と尋ねられる始末だった。その時、年配の番組ディレクターから、ヨルダンのように戦火が収まったとは言えないような土地では、よほど注意して行動しないと危険であるし、戦時下とも言える状況だから、「郊外へでも連れて行かれてズドンと一発やられて、そのまま埋められでもしたら死体なんか出てきませんよ」と嫌味な警告をされる始末だった。

浮沈の激しいわが波瀾の半生において、冥界に最も近づいたのは後にも先にもこの時を置いて他にはないとも言える。この衝撃的なハプニングはその後私の心身に、誰もが経験できないほど破天荒な臨場感を刻み付け、何事に対してもアクティブに歩む生きがいのある半生へ導いてくれた大きな転機となった。

3. アンマン再訪の決断

その悪夢のアンマンへはいつの日にかもう一度訪れてヨルダン兵に拘束された現場を確認してみたいとはかねがね考えていたが、長いブランクを経て思い切つて再び思い出の地を訪れ、現場でなぜあの時軍隊に捕まったのだろうと反省し、考えてみることもこれからの半生に高揚感を抱えて送るうえで、大切なことではないかと前向きに考えた。来し方来し方を想い、人生をリセットしてみようと当時の現場を検証してみることを決めたのである。



若者の旅について母校の先輩・根岸英一博士と語り合う

今年に入ってから具体的に行動しようと考えたのは、事件以来45年というひとつの節目の年を迎えたということ、偶々昨年創立90周年を迎えた母校・神奈川県立湘南高校が記念事業の一環として、校内に「歴史館」を新設したことがそのきっかけになった。僭越ではあるが、今春その「歴史館」内に後輩に夢と目標を与えら

れる卒業生のひとりとして、ノーベル化学賞受賞者・根岸英一博士や、石原慎太郎・東京都知事らと並んで、名誉にも私の活動歴も永久展示され、しかもそのタイトルが至極刺激的だったのである。

そこには「若い頃ヨルダン軍による身柄拘束の経験もある、ケタ違いの『海外現場臨場感重視』熱血行動派エッセイスト」と些か大袈裟に紹介されたのだ。このパンチの効いた文言に刺激され、この機会に一日も早く現地に足を踏み入れ、若かりし頃のその体験をもう一度確認し、拘束された現場で自らの若気の至りが生んだ行動を改めて検証してみたいとの気持ちで次第に募ってきたのである。同時に、今日のヨルダンとイスラエルの国交、パレスチナ問題、東エルサレム占領問題などを、あの当時と比べて、この目でしかと確認してみたいとの願望も次第に強くなってきた。

4. 昔の幻を求めたアンマンの一日

6月初旬私は逸る心を抑えるように「憧れ」のヨルダンへ向けて飛び立った。遥かに二千年もの昔モーゼが辿りついたネボ山、世界遺産・ペトラ遺跡、死海などを訪れて一旦イスラエルへ出国し、3大宗教の聖地エルサレムや、イエス・キリストが誕生した聖誕教会のあるパレスチナ自治区を訪れた後、再び陸路ヨルダンの首都アンマンへ入った。

ここで英語ガイドのムハンマドさんに案内役をお願いすることにした。ムハンマドさんにも45年前の屈辱的にして破天荒なアクシデントを鬱積した熱い心情を以って伝え、何としてももう一度現場を踏みたいという私の宿願を叶えてくれるよう協力を要請した。

アンマン市内に宿泊したのはイスラム教祝祭日の金曜日だった。丘の上のホテル直下の広場にはテント張りの屋外マーケットがどこまでも広がり大勢の人出でごった返していた。ホテルのダイニングルームで、翌日のプランをあれこれ考えつつダイナーを楽しみながら、イスラム国と法度のアルコール



一夜にして撤去された祝祭日市場のテント

を半信半疑でオーダーすると、意外にもビールならあると言う。だが、ビールはビールでも、提供されたのはやはりノン・アルコールビールだった。それでも昔はノン・アルコールビールなんて洒落た擬似アルコール飲料なんかなかった。それが今ではイスラム教徒の数少ない呑兵衛の欲望にも応えるようになり、少しは時代が《CHANGE》してきたのかと感慨深い気持ちで、ひとり静かにノン・アルコールビールを味わっていた。

翌朝窓を開けると眼下には前日のマーケットが綺麗さっぱり取り払わ

れ、ゴミひとつなく片付けられてそこは広い空き地となっていた。ここは間違いなくイスラム教国ではあるが、いつまでも祝祭日が続くわけではないのだ。



ローマ古代劇場前の筆者（上：45年前、下：今年）

朝食を済ませたころムハンマドさんが車で迎えに来てくれた。最初に昔宿泊した「アル・カサルホテル」近くの古代ローマ円形劇場を訪れた。幾多の歴史を見てきた石造りの建物は、45年前と変わらず懐かしく恋しく思われるような、今も趣のある重厚な歴史的建造物である。昔もここで写真を撮ったことがあるが、工事のため板塀に蔽われていて、残念ながら内部に入ることはできなかった。この45年間にもこのローマ円形劇場では幾たびもドラマ「テロリスト」が演じられてきた。とりわけ衝撃的だったのは、2006年9月、英国人観光客が「アラーは偉大なり」と叫んだヨルダ

ン人イスラム教徒に狙撃され、7名が死傷した事件だった。

円形劇場を訪れた後、ダウンタウンのメインストリート沿いにあった、かつて「アル・カサルホテル」が立地していた商店街で古いレンガ造りの「懐かしい」ホテルを探した。だが、いくら探しても見つかることはできなかった。

ムハンマドさんに言わせると確かに昔はこの辺りにもホテルが数軒あったが、今では都市計画によりホテルは近代的なものに変わって、ここから離れたアップタウン地区に建設されるようになったそうだ。今もあの薄暗く冷ややかなホテルがそのまま残っていれば、ホテルにも何か私の拘束ドラマを記録した歴史の一端が残されているかも知れないと淡い期待をしていたこともあり、無念な気持ちになった。いずれにせよ時は移り変わった。

しばしその旧ホテル界隈の商店街を歩いた後、ムハンマドさんはこれから私が身柄拘束されたと思えるスポット近くへ案内してくれると言う。ついにあの45年前の拘束現場へ足を踏み入れるのだ。人知れず興奮と緊張感を憶えた。

ゆつくり走っていた車が不意に小高い丘へ向かってぐんぐん上り出し、周囲に庶民の民家が建て込んだ一角へやってきた。あの当時この辺りで拘束される前に撮った数枚の写真を見せるとムハンマドさんは、新たに家屋が建てられ周囲の様子は大幅変わっているが、ブロック塀の辺りに立ち止まり多分この辺りだろうと言う。そこで見晴らしの良い場所で車を降り、カメラを取り出し、遠景を撮っていたところ、ふと賑やかな甲高い声が聞こえた。ヨルダン軍兵士ではなく、今度は近所の子どもたちに取り囲まれてしまったのだ。兵士ならお断りだが、子どもたちなら大歓迎だ。ムハンマドさんが私の方を見ながら大きなジエスチャーを示してチャドルを被った近

所のおばさんに様子を尋ねている。聞けば、確かに第3次中東戦争中この辺りにはヨルダン軍兵士がよくパトロールしていたという。

しかし、残念なことに私が兵士らに取り囲まれ身柄を拘束された《This is the place》と呼ぶべきスポットは、いくら探し回っても周辺の環境が変わっていて確信を持つて特定することができなかった。確かにあの当座、頭の中はひどく混乱し、思考は停止し、無我夢中で景色を眺めている余裕などとはとてもなかった。この辺りであるに違いないと自分自身に納得させるだけで、しかとそのスポットを確認できたわけではない。当時に比べて



1967年ヨルダン兵に身柄を拘束されたとされるスポット

て大きく変容した現場のイメージと、半世紀近いブランクを思い、特定することはこれ以上無理だと考え、45年ぶりに再訪したスポットを離れることにした。「望郷の想い」を断ち切るのにはやるせない思いであったが、現実とは時代も社会も変わり、そのうえ周辺の住宅環境も大きく変わったようだ。当時私が捕まった様子をじつと見ていた周辺住民を探し出す

ことはほとんど不可能に近い。この辺りの空気を吸い、足を踏んだという実感だけを胸に収めて現場を特定することは諦めざるを得なかった。



拘束された現場周辺で兵士ならぬチビっ子に取り囲まれた

ムハンマドさんも私に同情してくれ、あちこち走り回っては更に情報を収集しようとして、行き交う通行人に状況を説明しては情報を求めてくれ、45年前の写真から推してこの辺りにほぼ間違いはないと言ってくれた。だが、現実には「アララの神のみぞ知る」だった。思い入れのあるこの場を離れることにした。

小高い丘を下りダウンタウンを一回りした後高低差の激しいアンマンの街を今度は反対側の丘の上に立つて、思い出の詰まった、谷底の窪地にあるようなアンマンの街に別れを告げることにした。

5. 想像以上に治安の安定したヨルダン

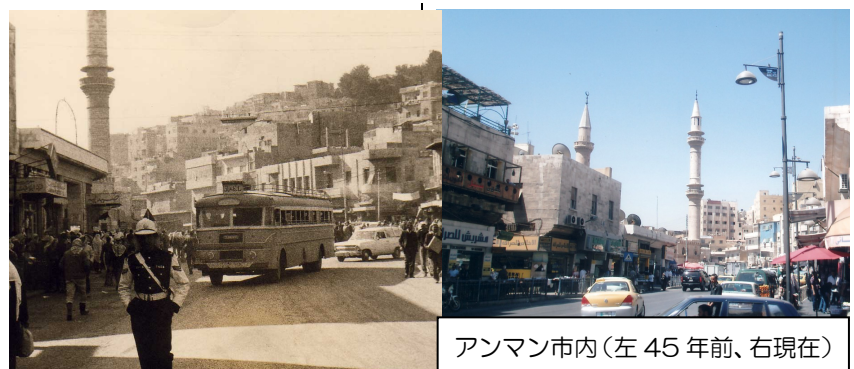
45年のブランクはあまりにも長く、大きかった。かつては戦時下にあったアンマンを、この後再び訪れる機会があるだろうか。後ろ髪を惹かれる

思いの中でせめてもの救いは、ともかく宿願だった45年前の現場を再訪できて時を経てその場の空気を共有できたという幾許かの満足感を得られたことであり、またヨルダンとイスラエルの対立関係が大分氷解したように見てとれたことである。

特に、激しく対立して過去に4回もの戦争を繰り返し苦汁を飲まされた隣国イスラエルとの関係が、意外にも表面上は大分友好的に思えたほど2つの国の間に目につくほどの大きな垣根がなかったことを、この機会に双方の国を訪れて感じ取った。おかげでまさか渡れるとは思ってもいなかったイスラエル・ヨルダン間のアレンビー橋国境を、大手を振って行き来することができたことも望外の幸せだった。

アンマンには1日滞在しただけだった。思い込みの強かったアンマン市内をまる一日探索した後ムハンマドさんが車で送ってくれたアンマン国際空港は、45年前とは大きく変わり、市街から大分離れた郊外の別の場所に移り、新装の空港ビルには、45年前に感じたアラブ風の独特なカリスマ的雰囲気や、一見雑然とした秩序、そしてアラブの乾いた土臭い匂いがまったく感じられなかった。「忘却とは忘れ去ることなり」とは言い尽くされているが、やはり近代的施設が造られる陰には、古き名残りは少しずつ消えていくのだろうか、一抹の寂しさを禁じ得なかった。

今日ヨルダンは少なくとも隣国のシリアやイラク、レバノンに比べて、社会情勢や治安は比較的安定しているように見える。1967年から翌年にかけて訪れたイラン、エジプト、レバノン、イエーメンなど他のイスラム国家では今も治安は安定せず、不倶戴天の敵・イスラエルと対立を続けている。その中で中々理解しにくいことではあるが、ヨルダンは幾分安定した治



アンマン市内(左 45 年前、右現在)

安状態の下に、領土を奪われたイスラエルとも互恵関係を保ちながら、人や物資の交流を絶えさせることなく大人の付き合いを続けている。この国の調和を重視した歩み方には、確かに時代を生き抜いたたかな智慧が感じられる。それでいながら、他のイスラム諸国は今もアラアの神の下に必ずしも一枚岩でなく、これから益々グローバルな国際社会に向って歩んだ時生じるであろう数々の混乱や軋轢の中を、彼らはどのように国の舵取りを担っていくのか、ヨルダンともども他のイスラム諸国が歩む行く末に、一層関心を抱いて注視して行きたいと思っている。

この度ヨルダンを再訪した縁の旅では、かつて身柄を拘束された所縁のスポットこそ特定することはできなかった。だが、それでも驚天動地のハプニングが起きた思い出の地を45年ぶりに訪れてみたという永年の宿願を果たすことができて、胸の奥に溜まっていた痞(つか)えが一遍に取れたように感じている。

ヨルダンは今でも青春のひた向きなパフォーマンスを思い起こさせ、背筋をぴんと正してくれる、懐かしきわが永遠のふるさどである。